

大学アーカイブズの意義と課題： 立教大学共生社会研究センターの経験から

高木 恒一
(立教大学)

はじめに

ただいまご紹介にあずかりました、立教大学社会学部の高木恒一と申します。社会学部の教員であるとともに共生社会研究センター副センター長を務めております。こうした場にお呼びいただいたことに、まずは御礼申し上げます。

今日お話しすべきことは、実は「アーカイブズって何ぞや」というようなことかなと思っていたのですが、今、谷合さんが非常に丁寧にかつ面白くお話しいただいたので、私はどうしようと思っているところです。ということで、私からは大学のアーカイブズという所、それから実は今日の立岩先生の最初の問題提起にもあった、大学にアーカイブズを置くということ、とりわけ「市民」の活動を記録するアーカイブズというものを大学に置くということがどういうことかということ、ささやかな経験から少しお話しをさせていただければ、というふうに思っております。

とは言っても、さて私がこれにふさわしいかと言うと全然、そういうことはありません。スライド3枚目でお示ししているように、私の専門は都市社会学で、都市政策や都市住宅などを研究しています。2010年に立ち上がった共生社会研究センターの設立当初はセンター長となり、今は副センター長となっておりますが、実はアーカイブズ学というのは全く学んだことがありません。資料を読むことはあっても、収集・整理・保存・公開などについて関わったことはありませんでした。ただひとつだけアーカイブズに関わったということがありまして、これは今になって「そう言えばこんなことあったな」ということがあります。私の研究者としてのスタートは、東京市政調査会というシンクタンクの研究員でした。現在、後藤・安田記念東京都市研究所という名前になっておりますが、1922年、日本で最初にできた都市問題に関わるシンクタンクです。ここには市政専門図書館というアーカイブズが設置されていて、東京をはじめとする各地の

行政資料を集め続けています。ちなみに先ほどお話を伺って面白かったのは、こちらの生存学研究センターの資料を年代順に並べているというお話です。実はこの資料の並べ方もそうなんですね。ですので「1950年代に盛り上がった住民運動は何か？」という、その棚を見に行くと分かるという、そういう仕組みになっています。

そういう所において、そこでユーザーとしてアーカイブズを利用し、それで歴史研究、あるいは資料の重要さには気付いておりました。ただしアーカイブズ学を学ぶにはいたらず、その状況のまま学内の、非常にひょんなことからセンター長を仰せつかることになったわけです。そして共生社会研究センターには平野泉氏という優秀なアーキビストがいて、例えばわたしが「アーカイブ」と言う、「一般的にアーカイブズって言うんです」とか、「アーカイブズって資料を集める所ですよ？」と言えば、「いえ、資料を取捨選択して捨てる所なんです」ということを教えていただきながら今日に至っている、いうところです。その意味では、素人が諸般の事情でアーカイブズに関わり、とにもかくにも走ってきた、その経験をお話させていただくことになろうかと思えます。

立教大学共生社会研究センターの概要

さて、この立教大学共生社会研究センターですが、設立はすでにお話したとおり2010年の4月です。国内外の多種多様な市民活動の記録を収集・保管・公開するアーカイブズとして設立されました。基本的に紙媒体中心です。デジタル資料については扱っていないと言うべきか、できていないと言うべきか、やっております。紙媒体を中心として、映像・音声・現物（ノボリ、ピラなど）の所蔵もあります。現物の中には、のちほどちょっとご紹介しますが、本物の偽造パスポートというのがあります。センター設立の目的は「国内外における多様な市民の社会活動に基づく資料を収集整理、保存、公開し、それに基づく実証研究を通じて、持続可能な共生社会の実現に資すること」（センター規則第2条）としています。

運営体制をご紹介します。運営委員会はセンター長1名、それから副センター長が2名です。現在私が副センター長、もう1人、埼玉大学から1名お願いしております。それから運営委員がこの3名（うち学外1名）を含めて6名で運営しています。さらにアーキビスト1名、アルバイト1名、それから大学院生のリサーチアシスタント4名で運営しています（スライド5枚目）。

センターの沿革（スライド6枚目）ですが、その源流は1976年に設立された住民図書館というアーカイブズと言いますか、図書館ということになります。これは丸山尚氏を中心に、住民運動・市民運動に関わるミニコミを収集・整理をするという、民間としては、今から考えると破天荒と言っている試みでありました。この活動は25年間も続くのですけれども、場所の確保ができない、スタッフはすべて手弁当という、きわめて困難な状況の中でミニコミを集め、保管・収集・整理し続けました。これらの資料が2001年に埼玉大学経済学部社会動態資料センター（のちに埼玉大学共生社会研究センターに改組）に移管されることになりました。社会動態資料センターはPARC（アジア太平洋資料センター）やベ平連、横浜新貨物線運動などの資料を、独自に収集していました。ここに、この住民図書館の収集したミニコミが移管されたわけです。その後も埼玉大学はミニコミの受け入れを継続したのに加えて、資料の収集・整理・公開を続けていきましたが、これらの資料をすべて立教大学に移管することとして、2009年に両大学は覚書を締結しました。これは埼玉大学としてはとてもとても大きな決断だったと思います。埼玉大学はスペースもそれなりに確保していたのですが、将来的にこれを安定運用できるという保証がないということで、「もう少し何とかなるのではないか」という期待を持って、立教大学にお話をいただいたということになります。そして2010年に立教大学共生社会研究センターが設置されました。当初はたいへんに狭いスペースで資料の公開もままならなかったのですが、2015年に現在の場所に移転しました。その顛末はそれだけで25分や30分しゃべれるだけのアレコレがありますが、ここでやっと資料の公開体制が整って、現在運用をしているところですよ。

所蔵資料ですが（スライド7枚目）、まずは市民活動に関わるミニコミ、住民図書館のコレクションを引き継いだものですが、これが現在も継続して寄贈をいただいています。これが日々、コレクションが増えております。それから非常に重要な資料としては、海外発行資料があります。アジア太平洋資料センター、PARCとい

う老舗のNGOがありますが、ここが国際交流を続けています。自分たちから日本の情報を出す、そして先方からもらって、ってというような交換をずっと続けているのですが、こういった過程のなかで届いたニューズレターや報告書を、定期的に私どもに移管していただいています。おそらく日本国内では入手困難な資料群であるのみならず、おそらく東南アジアの、例えば独立運動であるとか労働運動のですね、もはや先方が消滅し、所在が分からなくなったであろうと思われる、そうした問題の資料もあります。

そして住民運動・市民運動の資料のコレクションも持っています。その一部が本日持参したパンフレットの中に入っておりますので、こちらの方ご覧いただければと思います。例えばベ平連の関係資料であるとか、それから練馬母親連絡会の資料。練馬区は東京の郊外にあたる地域ですけども、ここでは1950年代から非常に活発な、かつ多彩な運動が展開されて、そのゆるやかな連合体が練馬母親連絡会という形で作られていました。この全資料を持っております。

ここに書かれていないものの一例をご紹介しますと、新聞などで取り上げていただいたもので、浜岡原発に関わる資料というのがあります。これは必ずしも反対運動の資料だけではありません。実は受け入れ推進していて、途中から反対に転じた地元の有力者がいました。その方が持っていた資料を、遺族から寄贈を受けたものです。中には、そこの地域対策に中部電力がどれくらい資金をつぎ込んだかがわかる一連の資料があります。その額は30億円。生々しい資料です。また原発関連では伊方原発の差し止めの最初の裁判の全資料も所蔵しています。このほかに宇井純氏の公害問題の資料、あるいは鶴見良行氏の研究資料なども所蔵しています。

これが書庫です（スライド8枚目）。ちょっと写真が見えにくいのですが、こういうような形でファイルボックスに入れ、これは中性紙のものを使っておりますけども、そこに入れてあります。この施設はかつて図書館として使っていたものです。立教大学の図書館施設はスペースが圧倒的に不足していたので、6年ほど前に大きな図書館を作りました。そこで空いた施設と書庫をやっとの思いで獲得しました。ここを獲得するのに5年かかったということということになります。ちなみにこの資料群は、新田勲さんという、地域で暮らすしょうがい者の方の資料群、そしてその隣が三井絹子さんの資料群、というふうになっています。

資料の一部をちょっと写真でご覧いただきたいんです

が、これがミニコミの一部です。これは『声なき声』（スライド9枚目左写真）ですね。ベ平連の源流ともなった、60年安保の時の、どこにも属さない人たちがデモをする、そうしたところから始まった「声なき声の会」の会報です。この会の事務局を務めていたのは立教大学法学部教授だった高嶋通敏氏でした。そうした資料が巡り巡って立教に戻ってきたという、非常に感慨深い資料です。

そしてこれは反アパルトヘイト運動を日本で支援をした人たちの資料群です（スライド9枚目中央・右写真）。こうした、これが初期に発行された通信であります。こちらの方はこうした手書きのメモなどもあるというようなこととなります。それから先ほだちょっとご紹介した三井絹子さんの資料（スライド10枚目）で、これはメモと、それからピラなど、こういうものが残されています。こうしたものもコレクションしているということになります。

センターの活動

続けて、私どもどういうふうな活動をしているのかということをご紹介したいと思います（スライド11～13枚目）。大学の機関ですので、まずは研究に関わる仕事ということがあります。具体的には、研究者への資料提供やレファレンスということをして続けております。そうしたひとつの成果として、2014年に、友澤悠季氏がセンターの資料を駆使して『「問い」としての公害——環境社会学者・飯島伸子の思索』という本を出版されましたが、これが地方自治・都市問題に関わる賞である後藤・安田記念東京都市問題研究所藤田賞を受賞した——私にとっては奇縁なのですが——ということで、大変喜ばしく思っているところです。友澤氏は現在長崎大学にお勤めの環境問題・社会運動の専門家ですが、埼玉大学以来のヘビーユーザーで、その成果を世に送り出させていただきました。ちなみに2016年に50歳を前にして亡くなられた道場親信氏にも、ヘビーユーザーとして私どもの資料を使っていたいていました。

一方で、こうした研究というだけではなく、資料集や論文集への資料の協力、例えば『戦後日本住民運動資料集成』（すいれん舎）というようなシリーズ、あるいは宇井純氏の未公開論文のコレクションの3巻本が新泉社から2014年に出ておりますが、この編集にも協力をしています。

そして、資料の貸出も行なっています。2014年、こちらのちょうどすぐそばの立命館大学国際平和ミュージア

ム「ピーススタイル」と企画展示に貸し出したことがありました。冒頭にご紹介した「本物の偽造パスポート」はここでお披露目しています。これはベ平連が脱走した米兵を北歐に亡命させる際に使ったものです。米兵を出国させるためにはパスポートが必要なわけですが、米兵はこれを持っていません。どうしたか。ベ平連の活動家のひとりに高橋武智氏という方がいます。立教大学の仏文の助教授だった方ですが、辞職してヨーロッパに渡って亡命のルートづくりをします。そのなかでパスポートの偽造技術を学び、その技術を使った偽造パスポートで亡命させたわけですね。本来ならばそれで、そのパスポートと本人、一緒に亡命して日本からなくなるはずなのですが、亡命した元兵士が律儀にも「もう1回使ってください」ということで、国際郵便で返送してきたんだそうで、それが私どものところにあるわけです。

それから昨年は、今年が1968年から数えて50年ということで、「68年」に関わる催しがたくさん開催されていますけども、その中で、千葉・佐倉市の国立歴史民俗博物館の『「1968年」——無数の問いの噴出の時代』という企画展示でたくさんの資料を使っていただきました。また国際平和ミュージアムでは、反核に関する展示をするということで、また資料を使っただけということで、大変ありがたいことだと思っております。そのほか講演会を年に1、2度開催しています。

それから教育活動です。特にいわゆる一般教養（立教では全学共通科目と呼んでいます）で2012年以来こうした形で講義や演習を展開しています。2012年、13年はまずミニコミについて。そしてそのあとはですね、その中から何を読み取れるかということをやりにながら、今もやっております（スライド12枚目）。このほか、文学部、社会学部、異文化コミュニケーション学部等々の演習に資料を提供する、というようなこともしております。

それからもうひとつ、私どもが大事だと思っているのが類縁機関との連携です。社会・労働関係資料センター連絡協議会、あるいは公害資料館ネットワークというところに加盟して、特に公害資料館ネットワークでは、公害資料館連携フォーラムなどの企画に参画しています。ただ、他大学のアーカイブズとの連携というのは、実はなかなかできていないということがあります。実は今日私がここに参上したのも、こうしたきっかけのひとつにぜひしたいという思いが来て来ているわけですが、どうしてもアーキビストの平野氏の個人的な関係に現状でとどまっているというのが悩み、ということになります。

大学アーカイブズの立ち位置とは

さて、こうして考えた私どもの活動ですが「それは一体なんなんだろう？」ということを考えて続けています。私、実は本当にアーカイブズのことを分かってなかったですね。本当に恥ずかしい話なのですが、当初は「倉庫番だろう」というふうに自分の仕事を思っていました。ところが1年間やってみたら全然違うんですね。それはおそらくこの2つのことで集約されるのではないかというふうに思うようになりました。

1つは「時をつなぐ」ということ。これはもう、私が何をここで延々と話をする話ではなくて、要するに、今ある資料や記憶や記録を未来につなげていく、という話です（例えば Wallot, 1991=2006, スライド 15 枚目）。しかしこれだけではありません。2つめについて、私はかつて次のように書いたことがあります。「市民活動の記録は市民どうしが様々な問題を巡ってつながり、共同してきた記録としてみることができます。そしてこれらのつながりの記録は、時を経て記録を読む人々と当事者、あるいは記録を読んだ人どうしの新しい交流を生み出します」（高木、2014：27）。言ってみれば、紙資料を中心とした「現物」を媒介として時間と人をつなぐというのがアーカイブズで、特に「人をつなぐ」ということの重みをしみじみ感じています。とりわけ大学という場ということ考えると、資料を寄贈いただく活動の当事者、一般の人（残念ながらここはなかなかつながるのが難しいのですけれども）、研究者、そして院生・学生がいる。そうした人々が1つの資料を目の前にして「ああでもない、こうでもない」という話をする。そうした場として、私どものアーカイブズはあるのではないかと考えています。

しかしそう言いつつ、実は足場が大変に不安定な気もしています。というのは、近年カナダではコミュニティ・アーカイブズ、あるいは北欧ではグラスルーツ・アーカイブズなどと言い方があるのだそうですけど、いわば地域に関わる、あるいは市民の活動に関わるアーカイブズに注目するという流れがあり、それをふまえて日本でも「草の根文書館」ということが提唱されています。そうした中で重要なこととして、3つの《み》ということが言われています。「みずからが」、あまねく「みんなのために」、「みらい（未来）に」向けてというこの3つの《み》です（北川、2003：292）。この2つ目と3つ目はいいのですが、問題なのは最初の「みずからが」ということで

すね。つまり先ほど谷合さんのご説明で言えば、機関アーカイブズ、それを地域レベル、市民の活動レベルとするというのが文書館、あるいは草の根文書館のあるべき姿というふうに言われているわけです。そうすると、収集アーカイブズっていうのは足場がないわけです。しかも特定の分野ではなくて市民の活動を広く集めるということは、「地域」、「住民」、「特定のカテゴリーの運動」といったコミットするポイントがありません。まして親組織の文書（資料）を集めるわけでもないわけです。そうしたアーカイブズというものは、どうもどこにも根を下ろせず、アイデンティティが弱いというようなことが、大学アーカイブズの強みでもあるのでしょけれど弱みでもあると思います（平野、2014、スライド 16 枚目）。

こうしたなかで拠る所をどこにするのが課題となるような気がします。大学の中で「市民」の記録を集めるアーカイブズの立ち位置はどこにあるのか。私自身はこのことを考えるなかで現在思い描いているのは、「市民の知」と「アカデミズムの知」の交差点となることはできないかということです。市民の知とアカデミズムの知というのを単純な2分法で語ることは非常に危険なことです。しかしあえてここではこういう言い方をしたいと思います。先ほどの塚原先生のご報告のなかで「市民科学」という言葉が出てきて、エクセルにデータを打ち込むというような、いわば科学への支援ということだったかと思うのですが、ここではもう少し積極的な意味をもたせたいと思います。

1960年代の市民運動・住民運動の中では、地域の中の開業医、あるいは高校の先生といった人びとが自分たちの足下の、例えば大気汚染の状況とか被害の広がり方をひとつひとつ丹念に拾い、それを形にすることで、その被害や公害の実相を明らかにする、こういうことを多数やっています。こうした知のあり方を市民科学と呼びたいのですが、このことについて、先ほどご紹介した宇井純氏は次のように言っています。「住民運動のおかれている過酷な条件を反映して、住民運動の作り出した科学的調査の内容も、一見すると原始的であるように見えるが、実はそこにしばしば科学の根源的課題が現れていて、優れた科学者ならば多くの示唆や刺戟をそこから受けるであろうし、特に自然環境を人間の立場から総合的にとらえるという方法は、現在の分析的手法の極みに達した科学にとっての1つの警鐘ともなるものがある」（宇井、2014：110）。

市民による科学的調査ということが行われているが、それは「原始的」だと。しかしそれは「優れた科学者な

らば多くの示唆や刺戟をそこから受けるであろうし、特に自然環境を人間の立場から総合的にとらえるという方法」だと指摘しています。注目すべきはおそらくここだと思います。アカデミズムはあくまでもアカデミズムの評価体系の中で「知」を考えます。それを市民の生活、市民の生活の実相という水準でとらえなおすという科学のあり方が、実はこうした市民の実践のなかで出てきて、宇井氏はこのことを評価したのだらうと思います。これは自然科学だけではなく社会科学・人文科学にも実は言えることだというふうに思っているのですが、こうした市民の記録を、市民科学の蓄積として位置づけることができなかなということなのです。

そんなことは私が考えなくても実は、というのが最後のオチになりますが、こんなエピソードがあります。実は埼玉大学に移管する時に大きな論争があったのだそうです。「市民の資料を、国立の機関に移管するとは何ごとだ」と。それに対して丸山尚氏はこんなことを言っています。「私たちの集めた資料がアカデミズムのど真ん中に位置するようになったことで、研究資料としての価値もいちだんと上がったと思う。そしてまた、アカデミズム自身が、従来の「学問・研究」の枠から脱皮し、市民の科学の立場をより重視し、市民が政・官・業の一角に地歩を築く力となる日が、一日も早くくることを願ってやまない」（丸山、2001：125-126）。

課題は山積しています（スライド18枚目）。しかし大学のアーカイブズが、こうした力を築くことができる場になれるといいな、というふうに思っているというところなのです。

時間を超過いたしました。以上です。御清聴いただきありがとうございます。

文献

- 平野泉、2014、「『市民文書館論』の一変奏」『地域史研究』114：2-1
- 北川健、2003、「文書館運動と資料保存運動のインターフェイス」全国歴史資料保存利用機関連絡協議会編『日本のアーカイブズ論』：287 - 293（初出1990）
- 丸山尚、2001、「住民図書館は、なぜ25年生き延びられたか」、住民図書館25年史編集委員会編・発行『住民図書館25年のあゆみ』：125-126
- 高木恒一、2014、「市民活動記録保存の意義と課題—立教大学共生社会研究センターの経験から」『住民と自治』612（2014年4月号）：25-28
- 宇井純、2014、「住民運動の作る科学」藤林泰・宮内泰介・友澤悠季編『宇井純セレクション3 加害者からの出発』新泉社：110（初出1973）
- Wallot, J., 1991, "Building a Living Memory for the History of our

Present : New Perspective on Archival Appraisal", *Journal of the Canadian Historical Association* 2 : 51-73（=塚田治郎訳、2006、「現在の歴史を生きた記憶として刻印する」日本記録学会・日本アーカイブズ学会編『入門アーカイブズの世界』日外アソシエーツ：81-115）

2018.12.1

公開シンポジウム 第1回「マイノリティ・アーカイブズの構築・研究・発信」

**大学アーカイブズの意義と課題：
立教大学共生社会研究センターの経験から**

高木恒一（立教大学社会学部／共生社会研究センター）



①

報告内容

- 1) 立教大学共生社会研究センターのご紹介
- 2) 大学アーカイブズの立ち位置：
センターの経験を通して

②

自己紹介

高木恒一（たかぎ・こういち）
立教大学社会学部教授
共生社会研究センター センター長（2010.4～2016.3）
副センター長（2017.4～）
専門：都市社会学（都市政策、都市住宅論など）
1994.4～1998.3 東京市政調査会研究員
現：後藤・安田記念東京都市研究所
都市行政文書アーカイブズである市政専門図書館併設
→ユーザーとしてアーカイブズを利用
→アーカイブズ学を学んだことはない

③

立教大学共生社会研究センターのご紹介

④

共生社会研究センターの概要

2010年4月、国内外の多種多様な市民活動の記録を収集・保管・公開するアーカイブズとして設立。紙媒体中心としているが写真・映像・音声・現物（偽造パスポート、ノボリ、ビラなど）も所蔵。

目的：国内外における多様な市民の社会活動に関する資料を収集整理、保存、公開し、それに基づく実証研究を通じて、持続可能な共生社会の実現に資すること（センター規則2条）

運営委員会：センター長、副センター長2名（学内1名、埼玉大学から1名）運営委員3名（うち学外1名）

スタッフ：アーキビスト1名、アルバイト1名、RA4名

⑤

沿革：住民図書館・埼玉大学・立教大学への系譜

1976年 住民図書館開設（館長：丸山尚氏）

住民運動・市民運動に関わるミニコミを収集・整理

1997年 住民図書館資料を埼玉大学経済学部社会動態資料センターに移管（後に共生社会研究センターに改組）

アジア太平洋資料センター（PARC）から継続寄贈を受けた海外市民団体の機関誌約5万点、ベ平連、横浜新貨物線反対運動、練馬母親連絡会などの市民運動資料、宇井純氏や鶴見良行氏の個人資料なども収集・整理・公開。

2009年 埼玉大学と立教大学で覚書を締結

全資料を立教大学に移管することを決定

2010年 立教大学共生社会研究センター開設

2015年 学内で現在地（メーザーライブラリ新館）に移転

資料の公開体制が整う

⑥

所蔵資料

- ・ **市民活動に関わるミニコミ**：約18万点
住民図書館コレクションを引き継ぐとともに、現在も約600の団体・個人より寄贈いただき、コレクションは大きくなっている
- ・ **海外発行資料**：約5万6000点
アジア太平洋資料センター（PARC）が収集した海外の草の根の人びとが発行するニューズレターや報告書など、日本国内では入手が困難な資料群の寄贈を受ける。現在も継続中
- ・ **住民運動・市民運動資料コレクション**
1960年代以降の日本各地の運動に関わる一次資料・裁判資料など
<http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/rcccs/>

⑦

書庫

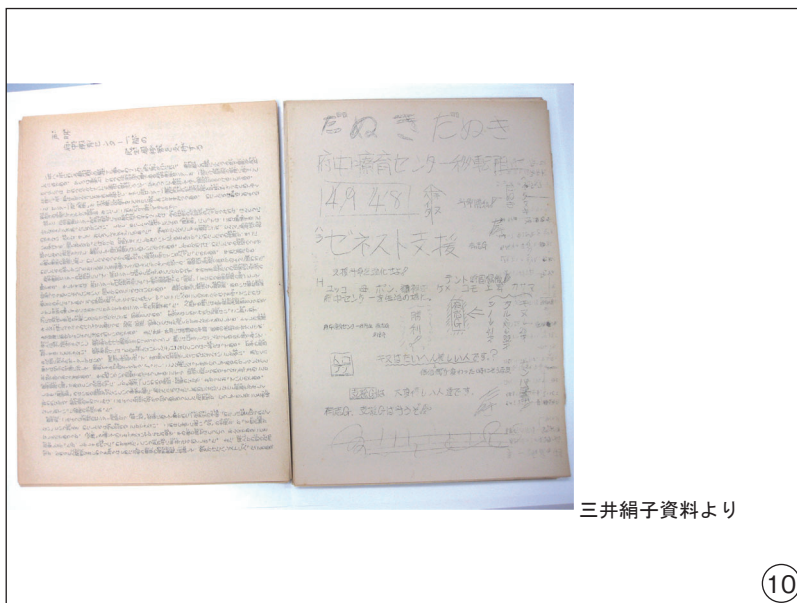


⑧

資料の一部



⑨



三井絹子資料より

10

活動：研究

・研究者への資料提供・レファレンス

友澤悠季、2014、『「問い」としての公害-環境社会学者・飯島伸子の思索』勁草書房（2014年度藤田賞受賞作品） 他

・資料集などへの編集協力

『戦後日本住民運動資料集成』（すいれん舎、2006-）シリーズ

『宇井純セレクション1-3』（新泉社、2014） 他

・資料の貸し出し（展示用）

立命館大学国際平和ミュージアム「ピーススタイル」（2014）

歴史民俗博物館「『1968年』-無数の問いの噴出の時代」（2017）他

・講演会 年に1～2回

『青空のもとで生きる権利-千葉川鉄公害訴訟一審判決から30年』（7.14）

11

活動：教育

全学共通科目の提案・開設

2012・2013年度「ネット時代におけるミニコミの可能性」

（講義・コーディネーター高木）

2014・2015年度「市民による知識創造の可能性」

（講義・コーディネーター高木）

2016年度「市民活動の記録を読む」（演習・担当平野泉）

2017・2018年度「市民が動く、社会が変わる」

（講義・コーディネーター高木）

このほか文学部、社会学部、異文化コミュニケーション学部などの演習への資料提供

12

活動：類縁機関との連携

- ・ 社会・労働関係資料センター連絡協議会
- ・ 公害資料館ネットワーク
- ・ 国内外の大学アーカイブズとの連携：平野泉氏（アーキビスト）の個人的関係にとどまる



13

大学アーカイブズの立ち位置：
センターの経験を通して

14

アーカイブズの意義：時をつなぐ、人をつなぐ

時をつなぐ

皮相的で、なにごと「お手軽な」現在の世界にあって、アーキビストは、いままで以上に、われわれの「記憶の家」にある宝を整備し、それを良く利用できるようにして、多くのひとびとの目に触れるようにしていかなければならないのです。(Wal lot, 1991=2006:108)

人をつなぐ

市民活動の記録は市民どうしが様々な問題を巡ってつながり、共同してきた記録としてみることができます。(中略)そして、これらのつながりの記録は、時を経て記録を読む人々と当事者、あるいは記録を読んだ人どうしの新しい交流を生み出します。(高木、2014:27)

- ・紙資料など「現物」を媒介として時間／人をつなぐ
- ・活動当事者・市民・研究者・学生をつなぐ

15

足場を持たないアーカイブズ

文書館のコンセプト3つの《み》

- 1) 「みずからが…」 「みずからの…」 文書記録の保存公開
 - 2) あまねく「みんなの…」 ために、文書記録の保存公開
 - 3) 遠く「みらい(未来)に…」 に向けて、文書記録の保存(北川、2003:292)
- 自らの機関/地域/テーマに依拠するものとしてのアーカイブズ

大学・収集アーカイブズとしての立ち位置

センターは、「(母)組織」「地域」「市民」「住民」「運動」のどれにも根を下ろせないアーカイブズのような(平野、2014:4)

→拠り所はどこに？

16

アカデミズムの知と市民の知の交差点としての大学アーカイブズ

アカデミズムの知と市民の知：例えば、住民運動のなかの「科学」

住民運動のおかれている過酷な条件を反映して、住民運動の作り出した科学的調査の内容も、一見すると原始的であるように見えるが、実はそこにしばしば科学の根源的課題が現れていて、優れた科学者ならば多くの示唆や刺戟をそこから受けるであろうし、特に自然環境を人間の立場から総合的にとらえるという方法は、現在の分析的手法の極みに達した科学にとっての一つの警鐘ともなるものがある。(藤林・宮内・友澤編、2014:110)

住民図書館資料の埼玉大学移管を巡って

私たちの集めた資料がアカデミズムのど真ん中に位置するようになったことで、研究資料としての価値もいちだんと上がったと思う。そしてまた、アカデミズム自身が、従来の“学問・研究”の枠から脱皮し、市民の科学の立場をより重視し、市民が政・官・業の一角に地歩を築く力となる日が、一日も早くくることを願ってやまない。(丸山、2001:125-126)

17

山積みの課題

・運営体制

規定上はスタッフは助教1名専任職員1名配置。現状は派遣スタッフ2名(うち1名がアーキビスト)で運営。

- 圧倒的な人手不足
- 業務(=知の蓄積)の継承の困難

・大学の無理解

- 大学の無方針
- 組織上の位置づけがあいまい
- 予算不足

⇒将来にむけて、どのように維持発展させるかを模索中

喫緊の課題：認知度の向上、専門スタッフの確保

18

文献

- 平野泉、2014、「『市民文書館論』の一変奏」地域史研究 114 : 2-1
- 北川健、2003、「文書館運動と資料保存運動のインターフェイス」全国歴史資料保存利用機関連絡協議会編『日本のアーカイブズ論』 : 287-293 (初出1990)
- 丸山尚、2001、「住民図書館は、なぜ25年生き延びられたか」、住民図書館25年史編集委員会編・発行『住民図書館25年のあゆみ』 : 125-126
- 高木恒一、2014、「市民活動記録保存の意義と課題—立教大学共生社会研究センターの経験から」『住民と自治』612 (2014年4月号) : 25-28
- 宇井純、2014、「住民運動の作る科学」藤林泰・宮内泰介・友澤悠季編『宇井純セレクション3 加害者からの出発』新泉社 : 110 (初出1973)
- Wallot, J., 1991, "Building a Living Memory for the History of our Present : New Perspective on Archival Appraisal", *Journal of the Canadian Historical Association* 2 : 51-73 (=塚田治郎訳、2006、「現在の歴史を生きた記憶として刻印する」日本記録学会・日本アーカイブズ学会編『入門アーカイブズの世界』日外アソシエーツ : 81-115